

中学校の部 最優秀賞

過去・今・未来

須藤 碧 さん  
(戸倉中学校2年・㊦津の宮)



お父さんに薦められてこの本を読み、自分とは違う考え方に共感しました。これからは時間を大切にしていきたいと思います。

『ステンドグラスの光の中に自分の人生を見つめます。いつかははかなく消える生命ならば、いまを大切に生きなければと思います。自分をさげださなければと思います。』  
私は、この詩を読み（この人はプラス思考で、考えが自分と全然違う）と感じました。今、これといった目標がなくあたり前のように今日を迎えて明日を待つ自分にとって正反対の言葉にすごく刺激を受けました。  
生命はいつか、はかなく消えるんだ。そんないつ消えてしまいかかわらないのなら、いまを大切に生きていこう。そんな正反対の考えに、すごく共感し自分の考えが変わったような気がしました。  
この詩は須永博士さんが放浪の旅を続けている間にかいた「ひとりぼっちの愛の詩」全二十七集の中の「絶望より立つ」にかかれてある詩の一つです。

私がこの詩集を読もうと思ったのは父がいます。父は私と同じでそんなに本が好きではありません。そんな父が「これ読んで見ろ」と薦めてくれたのがこの本でした。そんなに長くはない文章なのに一つ一つ読みすすめていくうちに色々な考えが出てきました。  
また、この詩集には、色々な姿の父がいる。父が生き方について私の心に力づけてくれる。というような父についての詩もありました。  
父がこの本を私に薦めてくれた背景には、この詩を読んでもらいたい、本を通じて思いを伝えようとしたのではないかと思います。

最近私は、父に対して何かと文句を言ったり否定するなど反抗してしまいます。確かに父の言うことは正しいこともあるけど、自分でもわからなくなるくらい反抗し、しまいは話さず聞こうともしません。反抗した後はすごく後悔をします。何であんな態度をとってしまったのだろう。素直になれないのだろう。  
そんな私にこの詩が色々な表情、姿勢でありのままの自分を見せてくれている父、私よりも何十倍もの人生を歩んで、私よりも何十倍もの喜び、悲しみを味わい、乗り越えてきたからこそ言える父の言葉、考えを持つていることに気づかせてくれました。さらに、父の偉大さに気づくことができました。

父についての詩の他にも家族、恋人、友達をかけた詩もありました。  
一方で、『歩いてあるいて歩きつかるほど、ひとつの道を、あるいてみたい(略)』のように、私はこのようにつかれるくらい一つのものを全うしようとしたことがあるのか？と自分を振りかえることができる詩があります。  
たくさん詩があります。もつとも私が好きな詩は、本の表紙になっている『人に負けてもいい。しかしやるべきことをやらない自分の弱さには、絶対負けたくない。』という詩です。  
これを読んで私は、自分のことを言われているのではないかと感じました。  
最近の私は、何かと挑戦をするようにはなりましたが、自分で壁をつくり途中であきらめることが多かったのです。  
そんな時にこの詩に出会い自分が弱いことに気づきました。そして、この詩に勇気をもらいました。つらくなくなった時、この言葉を思い出して頑張りたいと思います。  
私は、須永博士はこのような詩をどこで、どのような時に思い、書きあらわしたのだろう？作者はどんな人生を歩んできたのだろうか？と疑問をもちました。  
そこで、作者について調べてみました。  
すると、須永博士さんは第二次世界大戦の真只中に生まれ、生後間もなく、消化不良にて入院をしました。また、二十歳の時、父親の突然の死去。ひとりっ子のため、母と二人の生活を送り、仕事もうまくいかず会社をやめるなど、若いときから苦労したそうです。  
しかし、ここから真剣に自分の生きる道を探し求め、小さい頃から一番好きな絵や詩をかくことにしました。  
このような苦労や人との別れなどを乗り越えてきたからこそ、作者は今、未来、過去の大切さ、命の大切さ、生きていくうえでの大切なことを私達に語りかけることができるのだと思います。  
また、この本で短い言葉でも考えを伝えることができることを学びました。  
これからは、過去のことをふまえて、良い未来になるように今を大切に生きていきたいと思えます。

小学校高学年の部 最優秀賞

「ユタとふしぎな仲間たち」を読んで

熊谷 江里子 さん  
(志津川小学校5年・㊦大久保)



いつもはできないことも、仲間がいればできるんだなあと思いました。これからは友達を大切にしていきたいと思います。

「友だちはいいもんだ、目と目でものが言えるんだ。困った時は力をかそう。」  
なんてすてきな歌なんだろう、と感動しました。家でも歌っていたら、お母さんが、私の大好きな劇団のミュージカルソングであることを教えてくれました。すぐに本を買ってもらい、何度も読み返しました。  
主人公の水島勇太は事故でお父さんを亡くし、東京からお母さんの実家がある岩手県の田舎に引っ越してきました。東京では得意な勉強を生かして友だちと楽しく過ごしていましたが、田舎ではなかなか友だちができませんでした。また、体育が苦手で、息を切らしながら走る姿に、学校のみんなからは「東京のもやしっ子。」と言われ、名前も「勇太」ではなく「ユタ」と呼ばれ、いじめられるようになってしまいました。私は歌に感動した気持ち忘れず、わくわくしながら読み始めたのに、ユタのつらそうな様子、死んでしまいたいという気持ちにふれ、

私まで苦しくなってしまう。そんな勇太を心配してくれる人もいました。寅吉じいさんです。寅吉じいさんがかけてくれるやさしい言葉に、私も安心することができました。そして、どうしても友だちがほしいと思っていた勇太に、「座しきわらし」のことを教えてくれました。信じようとしないうちに寅吉じいさんは、「存在すると思えば存在するし、存在しないとすれば存在しない。つまり、その人の気持ちしだい。」  
と言いました。気持ちしだいでは人を変わっていけない。この言葉が、とても心に残りました。  
勇太は勇気をふりしぼって、教えてもらったとおり、満月の夜に会いに行くことにしました。いつもなら、夜一人でトイレにも行けない勇太のこの決心には、友だちがほしい、バカにされないように強くなりたいなど、たくさんさんの気持ちがあつたからだと思います。そして出会った座しきわらしたちは実は、お母さんのおな

かの中から生まれてすぐ貧しいからと口をふさがれて殺されてしまったり、栄養不足がとても悲しく、不幸な子どものようなかいでした。生きたくても生きる事が許されなかつた彼らは命をそまつにししようとした勇太をしかり、「せつかく生かされた命を大事にして。」  
とはげましてくれます。この言葉の意味を、私もしっかりと受け止め、考えていきたいと思えます。  
その後、勇太はふしぎな出来事とともに、心も体も成長していきます。そして、豊かな自然のすばらしさや、命あるものすべてがかげがえのない、とうとういものだと気づきます。私の住んでいる町も、川や海に囲まれ、自然がいっぱいで、夜の空はきれいな星が流れています。ゆつくり流れる時間の中でしっかりと生きる事の大切さに気付いた勇太のように、私もこの素晴らしい環境で生活できることに感謝し、今生きています。この命を大切にしていきたい

と思えます。  
私は、この本の中で出会った勇太や座しきわらしたち、寅吉じいさんの言葉から、たくさんすることを学びました。それは、信じる事の大切さ、そして何より、この世界にはどうすることもできない不幸なことがあるかもしれないけれど、生きることはとうとうと素晴らしいということです。これから私が生活していく中で、何か悩んだり、困ったことがあつたときは、この本を通して学んだことを思い出したいと思えます。そして、自分や家族、友達を大切にしながら、生活していきたいと思えます。  
書名：ユタとふしぎな仲間たち  
著者名：三浦哲郎  
出版社：講談社